日本語辞典はオノマトペに関して何を載せるべきか

大　野　純　子

1．はじめに

1970 年代に第二言語としての日本語教育が盛んになり、学習者に理解しにくいオノマトペが初めて注目された。そして研究の成果として天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』(1974)、浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』(1978) が出版された。

田尻（1989）はそれら２冊の辞典と、日英２か国語オノマトペ辞典３冊の内容をふまえて、今後の希望を述べたものである。それによれば、前者２冊に対する不足の点は、

ａ．アクセントと語義の関係への言及
ｂ．オノマトペの品詞の解説
ｃ．「～と」「～に」がつくか否か、畳語形があるかに関する記述

の３点にまとめられる。

2000 年代になってオノマトペ辞典は３冊立て続けに出版されている。本稿はこの３冊に 1990 年代に出版された１冊を加えた、以下の４冊を考察の主な対象としてとりあげる。

【a】阿刀田稔子・星野和子 2004 年『擬音語擬態語使い方辞典』創拓社出版 第２版（初版 1993 年）
【b】飛田良文・浅田秀子 2002『現代擬音語擬態語用法辞典』 東京堂出版　初版
【c】山口仲美編 2003『擬音・擬態語辞典』講談社　初版
【d】小野正弘 2007『日本語オノマトペ辞典』小学館　初版

また、母語話者、学習者共に一般の国語辞典（電子辞書、web 上の辞書を含む）でオノマトペを引く人が圧倒的に多いことから、これらも適宜、考察の対象とする。「日中辞典」「英和辞典」などの二か国語辞典は対象としない。冒頭に紹介した田尻の指摘も考慮しつつ、まず以下に４冊の概要と比較を述べる。

2．オノマトペ辞典４冊の比較

辞書の編集はスペース、つまりコストとの戦いである。編著者は載せたいことを削りに削らなくてはならない。国語辞典は出版社の営業戦略上、項目数の多さを競う傾向があるので、一項目あたりのスペースはますます削られる。幸いにオノマトペ辞典には、少なくとも項目数を増やすためのスペース縮小はそれほど求められていないようで、比較をすれば明らかになるように、おのおの個性のある辞典になっている。以下に、４冊の概要を比較する。

2．1　見出し項目数、収録語数

数について述べる前に、各辞典には「何をオノマトペとして認めているのか」という、大前提の違いがある。その違いは、感動詞などオノマトペの周縁部にあると思われる語をどこまで含めるかということである。感動詞を含めているかは、それぞれの辞典の本編第１ページを見ると、すぐわかる。【b】は「あたふた」で始まる。【a】は「あーあ」、次が「あーん」、【c】、【d】は共に「あーん」で始まっているので、少なくとも【b】は感動詞の類を含めていないことがわかる。

以下に辞典の凡例等に記載されている数字をあげる。

【a】見出し項目 738、収録語数　約 1,700
（「この辞書の構成と使い方」による）
【b】見出し項目 1,064、収録語数　約 2,200
（「本書の特色と使い方」による）
【c】収録語数　2,041　（記載なしのため、索引による計測数。解説、コラム、特集含む）
【d】見出し項目　本編（うち方言 253）4,060（語形の違うものはすべて１項目として累算）、その他（漢語オノマトペ 287、鳴き声オノマトペ 217）、コラムで扱ったその他のオノマトペを含め　総計 4,564

【a】はコンパクトな辞典で、現代日本語の基本的なオノマトペを中心にオーソドックスな解説がつけられている。近年生まれた新しいオノマトペは収録されて

いないものもある。【b】は意味の解説、使い分けに重点を置いている辞典である。まず、すでによく整理されている用例を数多くあげ、その後に分類ごとの説明がある。それぞれの項目の用例が多すぎてかえって理解しにくいというきらいもあるが、意味の分析を詳述してあるところから、どちらかというと研究者向けであろう。【c】は編著者の意向で、古典での使用例、語の来歴に詳しい。特に近代文学の作品を読む時に便利である。【d】は書名に「擬音語・擬態語」等でなく、「オノマトペ」という語を用いた最初の辞典である。総称としてのオノマトペを用いた理由は、「擬音語と擬態語の区分の有用性に疑義があること」、「擬音語、擬態語の他に擬声語、擬情語という用語もあり、研究者によっては指示範囲が一定でないこと」の２点による。すでに研究論文のタイトルでは「擬音語・擬態語」より「オノマトペ」のほうが、多く用いられており、今後は辞書もその方向に進むと考えられる。

２．２ 想定する利用者

各辞典とも、二か国語辞典ではないので特に学習者を意識しているわけではない。 母語話者は四字熟語や難読漢字は辞書を引いても、わざわざオノマトペを調べることはそれほど多くない。オノマトペ辞典を引く成人の母語話者は学生、研究者、教師、翻訳者などで、かなり限定されるだろう。また、教師は自分の理解のためではなく、学生に説明するために利用することがほとんどである。

【b】の「はしがき」によれば、語義の解説は「情緒的・雰囲気的な用語（具体的には和語の形容詞・副詞）や他の擬音語・擬態語の使用を避けて、外国語にそのまま翻訳可能な客観的な用語を用いて記述し、外国人の日本語学習者にも正確な理解ができるように心がけた」とある。【c】は学習者の他に、翻訳者の利用も想定していることが明記してある。

２．３ 用例の採集

用例の採集方法は、

①文芸作品などの既成のものから採用する

②作例をする

③折衷案として前者の方法で集めた文を翻案する

の三通りがある。４冊の辞典はそれぞれ次のような方法で用例を採録している。

【a】作例のみ

【b】文学作品の翻案、文学作品以外の文（ことわざ、標語、CM など）から引用

【c】古典を含む文学作品、新聞・雑誌から引用、一部作例

【d】古典を含む文学作品、新聞、エッセイ、雑誌、歌詞などから引用、作例

このうち、古典、近代文学作品を積極的に採り入れているのは【c】、【d】である。

２．４ アクセントの記述

「カンカン[1)]」というオノマトペは「カンカン（アッパー・ラインの部分を高く）火がおこる」あるいは「（人が）カンカンに怒る」というアクセントの違いで意味が変わってくる。しかし、前者の意味であっても助詞「に」がつくと「カンカンに火がおこる」のように、アクセントが変わってくる。

【a】はアクセントに関して綿密な記述がある。【b】は一応すべての例文のオノマトペにアクセント記号が付与されているものの、アクセントの下がり目記号（¬）の記載はない。そのため辞書にない、名詞化したオノマトペの複合語（例：「ニヤニヤ笑い」[2)]）、または次に置かれた助詞のアクセントがわかりにくい。

【c】、【d】は原則的にアクセントを示していない。日本語アクセント辞典は数種あるがどれもオノマトペの記載がそれほど多くないので、学習者、または母語話者が朗読あるいは、アナウンスなどの必要からオノマトペ辞典を引いた場合、情報不足になろう。

２．５ 品詞

４冊とも特に「副詞」「名詞」「ナ形容詞」などの表示はない。スル動詞になるものについては、【a】は表示している。他の３冊は用例としてあげている。

オノマトペ辞典に記載のある語は副詞が中心なので、品詞の明示は必要がないということかもしれない。品詞に言及せず、「頭にちょんちょ（こ）りんをつけたかわいい女の子（【b】p.292）」「よちよち歩き（【a】p.554）」のように、名詞として使われた用例は時々ある。ただ、問題はたとえば「ざわざわ」、「がさがさ」を見ても説明部分に「ざわめく」「がさつく」という動詞の記載が４冊ともまったくないことである。これらの動詞は確かにオノマトペそのものではないが、関係語彙として補足されるべきである。

一方、国語辞典は立項の語すべてに品詞をつける建前なので、「ざわめきは名詞」「ざわめくは動詞」、「ざわざわは副詞」と一つ一つ記載がある。ただ、語釈の方は「ざわめく」を見ると、「ざわざわと騒がしいようすになる（『デジタル大辞泉』）」とあり、「ざわ」の

意味がわからなければ、どうどう巡りである。

2．6 承接

1．であげた田尻（1989）の指摘する３点のうちのｃ．に関することである。【a】はこの点、学習者にとって最も親切であり、「～に」「～と」または「φ」を明記している。【b】は語釈の中で細かく説明しているものの、文章の中なので学習者には多少わかりにくいかもしれない。【c】は語によって、解説している場合と、そうでないばあいがあり、統一されていない。【d】は特に明示はせず、用例で表している。

2．7 索引

【a】、【c】は本編と付録に記載されているオノマトペを五十音順に並べた一般的なものである。【a】には逆引き索引も載せられている。

【b】の索引（表Ⅰ）は通常の索引にユニークな工夫を加えている。まず特徴的なのはオノマトペだけでなく、本編、付録の中からキーワードとなる語を抜き出し、オノマトペと一緒に並べてある点だ。たとえば、「あ」の項では冒頭「あーん」の次が「愛嬌」「挨拶」「愛情」「合図」「愛惜」で、「愛嬌」の箇所には関係するオノマトペが載っているページが書かれている。

さらにこれらの項目（オノマトペ、キーワードの両方）の大部分には、４つの記号が必要に応じてつけられている。その４つとは、①文体の硬軟、②使用者、使用対象の制限、③時間、距離、数量、程度など、④ニュアンス、込められた感情、文化的背景等である。【d】の索引（表Ⅱ）は、一般的な索引とは別に、意味から分類をした索引も載せている。たとえば、「天気に関するオノマトペ」の「雨・雪・水」の項では「ざーっ、しとしと、ちらほら」などのオノマトペをまとめ、それぞれ 13 字以内で簡単に説明も加えている。

３．国語辞典とオノマトペ辞典に見るオノマトペの立項

この節では一般の母語話者がよく用いる電子辞書の国語辞典と、児童が用いる小学生用国語辞典、そして前述のオノマトペ辞典４冊について、４種類のオノマトペの立項を観察する。（表Ⅲ）

それぞれのグループは、共通する核の部分（たとえば「コロ」「ジリ」など）を持つ。「ＡＢリ」「ＡＢン」「ＡＢッ」など、できるだけ形態がバラエティに富むものを選び、複合語も含めた。

少ない事例だが、少数の例外を除き、いずれの辞典もＡＢＡＢ型はまず第一に親項目として採りあげている。ＡＢＡＢ型は数が多く、全体的に他の型（例：ＡＢ、ＡＢリ、ＡＢンなど）より意味を多く担っているところから、妥当な選択である。

まず、共通要素「ジリ」と「パキ」のグループでは、国語辞典の（1）、（2）、オノマトペ辞典の【a】はともに、原則的にＡＢＡＢ型のみを立項している。

最初の共通要素「コロ」と３番目の「チラ」も同様にＡＢＡＢ型はどの辞典も立項させている。「コロ」と「チラ」は「コロリンシャン」「チラホラ」など複合オノマトペの形がいくつかある。「コロ」のバリエーションは国語辞典ではほとんど無視されているが、「チラ」のバリエーションは複合語というより、オノマトペ一語としての受け取り方であるためか、国語辞典もいくつかを載せている。

国語辞典は字数上の制約が強く、オノマトペ辞典ほど立項ができないのは当然であるが、何を立項させるとかいう判断基準は多少曖昧な点がある。また、もう一つの問題は説明部分に安易に語形の違うオノマトペを載せてすませる傾向があることである。

たとえば（１）『デジタル大辞泉』の「コロコロ」の項には、以下のように書かれている。

（用例は省略。下線は筆者による）

ころ－ころ　〖副〗（スル）
①まるい物、小さい物などが軽快に転がるさま。
②ものが容易に倒れるさま。<u>ころりころり</u>。
③物事が簡単に転じていくさま。<u>ころり</u>。
④丸々として、かわいらしいさま。
⑤鈴の音、笑い声、蛙の鳴く声など、高く澄んだ音が響くさま。

②の下線部は「コロリコロリ」は親項目として立項されておらず、他の項目にも記載がない。③の下線部「コロリ」は立項がある。

ころり　〖副〗
①急に転がったり倒れたりするさま。
②あっけなく死んだり、負けたりするさま。
③前とすっかり違う状態になるさま。

これらの説明を読んでも、「コロリコロリ」は「コロリ」という動きが繰り返されていることが前提であること、また「コロリ」の「リ」にどのようなニュアンスがあるかの２点は解決されない。

また、「チラリチラリ」「チラリホラリ」は両方とも親項目だが、辞書の記載は以下のようである。

ちらり－ちらり　〖副〗「⇨ちらちら」に同じ。

そこで「チラチラ」を見ると、

ちら－ちら　〖副〗（スル）

①小さいものが飛び散るさま。

②小さい光が強まったり弱まったり、また細かく揺れ動いたりするさま。

③断続してものを見るさま。ちらりちらり。

④物が見え隠れするさま。

⑤うわさなどが少しずつ、また、時々耳に入るさま。

次に「チラリホラリ」を見る。

ちらり－ほらり　〖副〗

①「⇨ちらほら」に同じ。

②小さな花びらなどが、ゆっくりとまばらに飛び散るさま。

③すばやく動くさま。

上記①に書かれた「チラホラ」を見ると、

ちら－ほら　〖副〗

少しずつまばらにあるさま。また、たまにあるさま。ちらりほらり。

とある。どうどう巡りと、語形の違いの無視が甚だしい。

4．国語辞典の記述
――2組のオノマトペを例に

もっとも、辞典というものは一定のサイクルで改訂を行い、進歩をしているものだ。ここでは『広辞苑』の改訂例をあげる。『広辞苑』は、『大辞林』（三省堂）と並んで電子辞書搭載シェアの上位を占めているので、母語話者か学習者かを問わず、多くの人が頼るものである。以下は第4版（1991）と、第6版（2008）の改訂結果の比較である。

（下線は筆者による）

第4版

きっぱり　明確に決するさま。はっきり。断然。
「－と断る」

はっきり　①あきらかなさま。分明なさま。
「－と見える」
②さわやかなさま。すっきり。
「頭が－しない」
③たしかなさま。あいまいなところがないさま。しっかり。
「－決める」
「今の若い人は－している」

第6版

きっぱり　言動や態度が断固としていて明快であるさま。
「－と断る」「－した態度をとる」

はっきり　①物事が確実で明らかであるさま。ものの輪郭が明瞭であるさま。
「－断る」
「今の若い人は－している」
「－と見える」
②（体調や気分が）さわやかなさま。
「頭が－しない」

第4版と6版は約20年の開きがある。「きっぱり」「はっきり」はオノマトペという意識が薄れ、非オノマトペの副詞と同類になりつつある。しかし、このような語でさえ、第4版は安易な置き換えをして説明している。数十年前、オノマトペがいかに重要視されていなかったかの現れである。利用者側から見れば、簡単な置きかえは一見理解しやすいように見えるが、よけいな混乱の原因になり得る。第6版はそのような言い換えを控えている。しかし、これは辞書全体の方針というわけではないらしく、次のような記述も見られる。

第4版

おど－おど　（オヅオヅの転）　恐れたり自信がなかったりして、落ち着かないさま。おじおじ。
「－せずに堂々と行け」

第6版

おど－おど　（オヅオヅの転）　不安や恐れで挙動が落ち着かないさま。おじおじ。
「－と眺めまわす」
「先生の前で－する」

第6版「おどおど」の項では、二番目の説明として「おじおじ[3]」と一言で置き換えている。

次に意味の比較をするために、「オドオド」と部分的に共通する意味を持った「オズオズ」の記述をあげる。

第4版

おず－おず　【怖ず怖ず】　おそれてひるむさま。こわごわ。おそるおそる。
「－尋ねる」

第6版

おず－おず　【怖ず怖ず】　おびえたり自信がなかったりしてためらうさま。こわごわ。おそるおそる。
「－と尋ねる」

「オズオズ」は基本的に「オズオズと／オズオズし

て～スル」の形で用い、何かをするときに「オズオズとしている」という形容をしている。単独で「オズオズスル」のスル動詞としてはあまり用いない。第４版、第６版はともに、動作を控える、または動作がしにくいことを示唆する説明にとどまっている。「両親のけんかを毎日見ているから、子どもがオドオドしている」とは言うが、「子どもがオズオズしている」とは言わない。「オズオズ」はためらいながらも何かをするという点に重点がある。一方、「オドオド」は「不安で落ち着かない」という状態の形容でもよいし、「オドオドしながら言う」のように動作と併存する状態、動作を表してもよい。その点、『デジタル大辞泉』の次の説明のほうが、優れている。

おず－おず　【怖ず怖ず】〖副〗
《動詞「おず」の終止形を重ねたもの》
恐れてためらいながら物事をするさま。おそるおそる。
「－（と）進み出る」

この「オズオズ」の説明なら、「ためらいながらも何かをする」ことが読みとれ、「オドオド」との区別がしやすい。次に、「オドオド」を見てみる。

おど－おど　〖副〗（スル）
《「おずおず」（おづおづ）の音変化》
緊張・不安や恐怖心で落ち着かないさま。
「人前ではいつも－している」

とある。残念なことに両方の項目に、中途半端な来歴をあげているため、この来歴を見る限り、使用者は再度「オズオズ」と「オドオド」の違いがわからなくなりかねない。このような点が、辞書編集者自身の目標と、一般使用者の受容能力との差である。

最近の電子辞書は何冊かの国語辞典に加えて、類語辞典も搭載していることがある。ここで「オズオズ」と「オドオド」が混乱してしまった利用者は類語辞典を見るだろう。ここには類語の共通点が簡潔にあげられており、具体的な使い分け一覧もある。たとえば「大きな声で怒鳴られてオズオズ／オドオドした」のどちらが正しいかはわかる。しかし、偶然にこのような用例に完全に合致するものがあればよいが、そうでなければ、やはり誤用の余地が残る。

５．「現代オノマトペ実用辞典」の提案

本格的なオノマトペ辞典編纂は約 40 年前に始まったばかりだが、特にこの 10 年は充実した結果を出している。樹木の幹が充分太くなったところで、枝にあたるオノマトペ関係辞典を提案したい。ここで提案する「現代オノマトペ実用辞典」は「オノマトペの使用を促進すること」に力点を置いた実用辞典である。以下に、編纂上のコンセプトをあげる。

ａ．収録語の簡素化

古語、または、めったに使われなくなった語義は【c】、【d】、または白石『擬声語擬態語慣用句辞典』に任せて収録語を厳選する。

ｂ．典型的な共起の例を従来のオノマトペ辞典より多くあげる。１行程度の解説をつける。

例：「ポタポタ」の項
水、汗、涙、血　が　ポタポタ　落ちる、たれる
（床、地面に落ちるところまでを指す）
「ダラダラ」の項
水、汗、涙、血　が　ダラダラ　出る、流れる
（どの方向に行くかは考えなくてもよい）
ダラダラ　　話す、歩く
（話者はそれを長すぎる、だらしないなどと思っている）

ｃ．用例はあげない。

上記ｂ．の数を充実させ、文学作品等からの引用、作例は、従来のオノマトペ辞典に任せる。ただし、否定形にも適合するか、必要があれば例をあげる。

例：　＊涙が<u>ポロポロ</u>出なかった
　　＊空は<u>どんより</u>曇っていなかった
　cf.　<u>さっぱり</u>わからない
　　ここは空気が<u>カラカラ</u>していない

ｄ．オノマトペのイメージを記号化する。

【b】は「イメージ表記」として、最も高いプラス～最も低いマイナスまで７段階にわけて、語義解説部分の最初に「ややプラスイメージの語」、「ややマイナスよりのイメージの語」のように表記している。これを４段階にして、かつ記号化し、(++)、(+)、(-)、(- -)のように簡素化する。プラスマイナスのニュアンスを考える必要がないものには何も記さない。

例：ちゃっかり　(-)
　　ぬけぬけ　　(- -)

ｅ．何かを表現する際に用いるオノマトペとして標準となるものを参考にあげる。若者を中心に使われているアニメなどから生まれた新語、または新しい語義をすべて入れる必要はないが、10 年程度をめどにある程度まではカバーする。新しいものにはなんらかのマークをつける。

例：　バクバク　　心臓がバクバクする
　　（標準:ドキドキ。バクバクはより激しい動悸。〈n〉）
　　（〈n〉＝new）

ｆ．上記ｅ.のようなオノマトペには、くだけた使い方のものが少なくない。標準的なオノマトペより、くだけているものには記号をつけ、使用者に注意を喚起する。

例：　バクバク　　心臓がバクバクする
　　〈↓〉標準：ドキドキ
　　（〈↓〉＝格式が落ちる、くだけている）

ｇ．上記ｅ.あるいはｆ.とも関連するが、話者が使用する時、特に注意を要するものにマークを提示する。その目的はまず第一に、話者が知らずに相手の気を悪くさせる失敗を避けるためである。オノマトペは感情が込められたものが少なくないので、このような失敗は珍しくない。第二には、場に合わないくだけすぎたオノマトペを用いることを避けるためである。

このマーキングには編著者の志向が出やすく、学術的な記述とは言えないという批判も出てこよう。しかし、「実用辞典」として、特に外国人学習者のために、この記述が必要だと考える。

例：「けちょんけちょん」の項
　　〈c〉←マイナス方向に徹底的に（けなす）
　　←　（〈c〉＝chuui　使い方に注意）

これはたとえば、＊「先生に論文をけちょんけちょんにけなしていただいた」、＊「先生のお宅に伺ったら、子どもがうじゃうじゃいて驚いた」、＊「先生の奥さんは口数が少なく、うじうじした人だった」などの誤用を避けるためである。本人は「先生に論文を徹底的に批判していただいた」「お宅に伺ったら子どもがたくさんいて驚いた」「奥さんは口数が少なく、あまり自己主張するタイプではない」と言いたいだけかもしれない。

ｈ．索引を充実させる。

一般のオノマトペ辞典と異なり、本編をメイン、索引をサブと考えるのではなく、索引を本編と同様に位置づける。従来の索引に加えて、次の２種類を新たに加える。

①英和辞典に対する和英辞典のように、非オノマトペから引けるオノマトペの索引を充実させる。

現在のオノマトペ辞典は母語話者、学習者を問わず、与えられたオノマトペを調べることはできるが、「あることを表すのにどのようなオノマトペがあるか」という要求には応えてくれない。非オノマトペの表現から引ける索引があると便利である。このような索引があれば、利用者は使用語彙を増やすことができる。これは意味の網羅を第一目的にすると、大変書きにくく、また莫大な項目数になると思われる。しかし、ここでは細目の正確さより、代表的なものに絞って、煩雑さを減らした方が、利用者が引きやすいだろう。

例：　感動する　→　ジーンとする
　　恐怖で一瞬震える　→　ゾッとする
　　恐怖で震える　→　ゾクゾクする
　　寒くて震える（一瞬）　→　ゾッとする
　　恐くて震える（一瞬）　→　ゾッとする
　　たいしたことはない　→　ゾッとしない
　　気落ちする　→　ガッカリする、ガックリする

また、２．品詞 の箇所で述べたように、動詞を無視せずに索引に載せる。

例：　勝手にうるさく話し出す
　　（人々が）→　ざわざわする、（ざわめく）
　　肌が荒れる（乾燥して）→　がさがさする、
　　（がさつく）

【d】には「意味分類別索引」があり、類似のオノマトペが一覧できて便利である。約 4,500 の見出し語のうち 2,470 語を採りあげているが、必ずしも基本的な語という基準によったわけではないようで、「（あたたかい日ざしが差しこみ）なんなん」「（谷川の浅い清流などが流れて）せんせん」「（やわらかい土や砂の上を歩き）さくりさくり」など、一般的とは言えないオノマトペも収載されている[4)]。

ここで提案したいのは、上記の例の左側（オノマトペを使わない表現）の項目を増やし、

オノマトペの方は数を絞る方法である。

②日常生活の代表的なシーンでのオノマトペを列挙し、その索引を作成する。

「米をとぐ」というのは日本人にとって、珍しい動作ではないはずなのに、その時の音をどのオノマトペで表現するか一定していない。12 名の日本語教師に聞いたところ、一番多かった答えは「シャカシャカ」（4 名）で、その他「ゴシゴシ、サクサク、シャラシャラ」など、答えが 7 種類もあった。「シャカシャカ」は国語辞典はもとより、オノマトペ辞典 4 冊中、【d】にしか記載がなく、しかも、米をとぐ音とは書いていない。

現在の我々にとって古語のオノマトペは奇妙に聞こえるものが少なくない。数世紀前はもとより、わずか１世紀前のオノマトペでも、使われなくなったものも多くあり、たまに見聞きしても違和感がある。そこから推測すれば、現在使われているオノマトペも 1 世紀後にはどう変化するかわからない。「ピンポン」とい

うチャイムの音、帰宅してドアをバタンと閉め、カチャリと鍵をかける音、スリッパで廊下をペタペタ歩き、シャカシャカ音のするウインドブレーカーを脱ぐ。これらのオノマトペは百年前の人には表せまい。日常の動作にどのようなオノマトペが主に使われるか、一覧にしてみることは、後世のために価値があることではないだろうか。と同時に学習者のためにもなるのも事実である。子どものための絵本などにはこのような試みがなされているものがあるが、より広範囲で、成人の使用にも耐えるものも必要である。

6．おわりに

ここで提案した「現代オノマトペ実用辞典」は記述主義に徹したものではなく、従来のオノマトペ辞典より多少規範性を強めたものになるかもしれない。とらえどころがないと思われがちなオノマトペをこのような形で敷衍し、さらに複数のオノマトペ実用辞典が生まれれば、将来は国語辞典の記述、またオノマトペ辞典にも影響を与える可能性もあると考える。

註

1）本稿のオノマトペは、弁別機能を持たせるためにカタカナで表記することを原則としたが、副詞としてオノマトペの印象が薄いもの（例：きっ（と）、たっぷり、ゆっくり）はひらがな表記が多いので、無理に統一することは避けた。

2）辞書に載っているもの、たとえば、「ブラブラ歩き」「ザンザン降り」などは、名詞の部分にもアクセント記号が施されている。

3）「おじおじ」は意外なことに、オノマトペ辞典4冊中【d】にしか記載がなかった。その用例は明治期の文章、仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』から採ったものである。

4）【d】に「どろどろも、とろとろ同様、おいしい食べ物に使われることが多い」（p.305）とあるが、賛成できない。

参考文献

赤野一郎　2000「データ収集をめぐる闘い」『言語』vol.29-5 大修館書店

浅野鶴子編　1978『擬音語・擬態語辞典』角川書店

阿刀田稔子・星野和子　2004『擬音語擬態語使い方辞典』創拓社出版第２版第３刷

天沼寧編　1974『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版

沖森卓也　2006「国語辞典の意味記述－語釈の示し方を中心に－」『日本語辞書学の構築』おうふう

小野正弘　2007『日本語オノマトペ辞典』初版第１刷

国広哲弥　2000「規範主義と記述主義」『言語』vol.29-5 大修館書店

倉島節尚　2008『日本語辞書学への序章』大正大学出版会

白石大二　1982『擬声語擬態語慣用句辞典』東京堂出版

新村出編　1991『広辞苑』第四版岩波書店

_____編　2008『広辞苑』第六版岩波書店

田尻英三　1989「擬音語・擬態語辞典にのぞむ」『国文学解釈と鑑賞』54巻１号至文堂

田近洵一　2010『例解小学国語辞典』第４版　三省堂書店

飛田良文・浅田秀子　2002『現代擬音語擬態語用法辞典』　東京堂出版　初版第１刷

日向茂男・笹目実　1999「語形からみた擬音語・擬態語Ⅱ」『東京学芸大学紀要２部門』50

山口仲美編　2003『擬音・擬態語辞典』講談社初版第２刷

山田進　2006「意味から引く辞書」『日本語辞書学の構築』おうふう

〈電子版辞書〉

『使い方のわかる類語例解辞典』小学館

『デジタル大辞泉』三省堂書店

表１：【b】索引の一部

ぎすぎす……73,78,79,322
軌跡……533
汽船……538,540
規則……5,271
ギター……580
気体……156,550,606,615
期待(感)……8,251,258,320,630
擬態語……184,279,291,343
気体の移動……550
着丈……308
汚い物……576
汚らしさ……219
きちきち(っ)……80,82,84,85,96,246,447

表２：【d】索引の一部　「雨・雪・氷」の項

雷の音がとどろき轟いて　ごろごろ 138
雪やあられが次々と降って　こんこん 143
大粒の雨が続けて降って　ざーざー 145
通り雨が軽く一時に降って　さーっ 145　さっ 149
夕立がはげしく一時に降って　ざーっ 145　ざっ 149
雨や波が勢いよく打ちつけて　ざざっ 148
雨や風などが騒がしく　ざんざら 158
雨が勢いはげしく降って　ざんざん 158
雨などがしめやかに降って　しとしと 169

表３：国語辞典、オノマトペの立項

◎→　親項目で説明があるもの

○→　親項目以外（類義語、付録、コラムなど）で説明があるもの

▲→　表外に注記があるもの

（1）『デジタル大辞泉』（電子辞書搭載）（2）『例解小学国語辞典』第４版

共通要素「ジリ」		(1)	(2)	【a】	【b】	【c】	【d】
ＡＢ	ジリ				▲[1]		
ＡＢッ	ジリッ			○		◎	◎
ＡＢー	ジリー				○		
ＡＢーッ	ジリーッ				○		
ＡＢＡＢ	ジリジリ	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ＡＢＡＢッ	ジリジリッ				◎	○	
ＡＢリ	ジリリ						◎
ＡＢリＡＢリ	ジリリジリリ						◎
ＡＢン	ジリン						◎

共通要素「パキ」		(1)	(2)	【a】	【b】	【c】	【d】
ＡＢッ	パキッ				○		◎
ＡＢー	パキー				○		
ＡＢＡＢ	パキ	◎		◎	◎	○	◎
ＡＢＡＢッ	パキッ				◎	○	
ＡＢン	パキン						◎

共通要素「コロ」		(1)	(2)	【a】	【b】	【c】	【d】
ＡＢ	コロ				◎		
ＡＢッ	コロッ	◎		◎	◎	◎	◎
ＡＢＡＢ	コロ	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ＡＢＡＢッ	コロッ				◎		
ＡＢリ	コロリ	◎		○	○	○	◎
ＡＢリＡＢリ	コロリコロリ						◎
ＡＢリＣＢリ	コロリカラリ					◎	◎
ＡＢリン	コロリン				▲[2]	◎	
ＡＢリンＣン	コロリンシャン					◎	◎
ＡＢン	コロン			○	○	◎	◎
ＡＢンＡＢン	コロンコロン					○	◎

共通要素「チラ」		(1)	(2)	【a】	【b】	【c】	【d】
ＡＢ	チラ				◎		
ＡＢッ	チラッ			○	◎	○	◎
ＡＢー	チラー				○		
ＡＢＡＢ	チラチラ	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ＡＢＡＢッ	チラチラッ				◎		
ＡＢリ	チラリ	◎	◎	○	◎	◎	◎
ＡＢリＡＢリ	チラリチラリ	◎			○		◎
ＡＢＣＢ	チラホラ	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ＡＢリＣＢリ	チラリホラリ	◎			○	◎	◎

1）「コロリ」の項ではなく「スッテンコロリン」の項に後半部分「コロリン」の解説がある。

2）「ジリジリ」の項に「じり貧」という語とその説明がある。